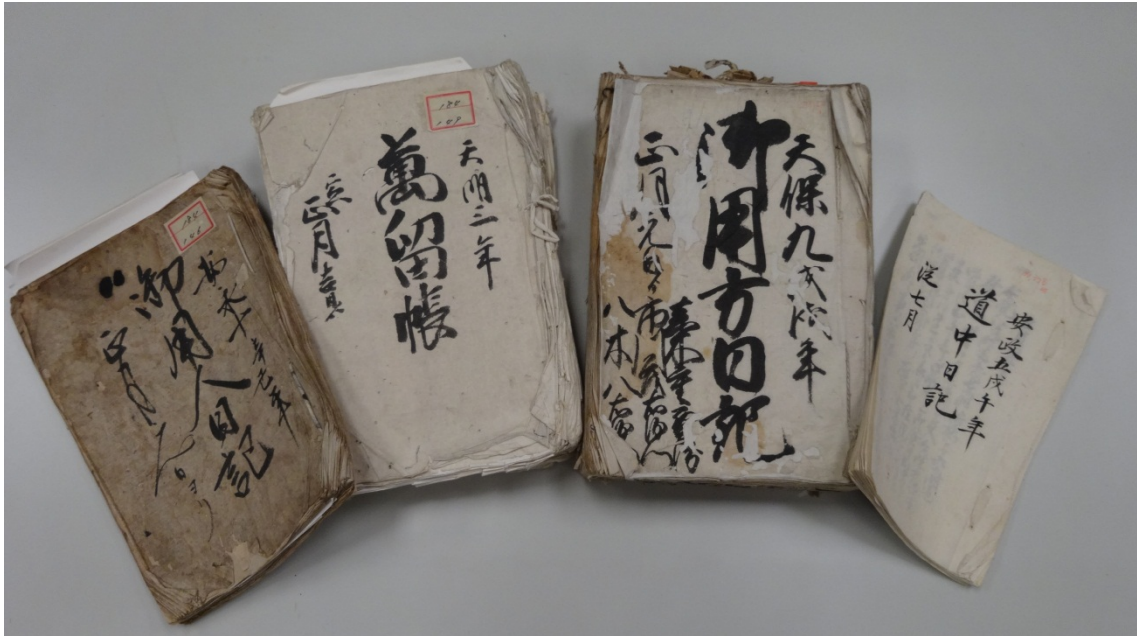


『田原藩日記』と御殿様の日常について

平成 25 年 6 月

田原市博物館



1 『田原藩日記』について

田原市博物館は『田原藩日記』と総称される総計 506 冊の資料群を所蔵しています。これらは、田原藩主・三宅氏に仕えた武士たちが藩政の記録や日々の事件などを書き綴っていったものです。記録は淡々としたものですが、藩主急死後の家督相続を巡る混乱や、地震などの災害とその後の対応の記録、幕府に処罰され、蟄居となった家老・渡辺華山への対応など、貴重な内容も含まれています。また、当時の藩の行政機構などを考えるうえでも、基礎資料となり得るものです。

ただし、この日記類はそのほとんどがくずし字で書かれているため、現代の我々が読むにはいささか困難です。そこで、現在華山会館の 2 階でこれらの資料を読み解き、活字化する作業を行っています。この作業は昭和 56 年に始まり、中断もありましたが続いています。

本展示では、それらの読み解かれた日記の中から、主に第 11 代藩主の三宅康直の仕事外（いわゆるオフ）の時間帯の記録を抽出し、その日々の行動、彼が見聞したも



晩年（60 代後半？）の三宅康直像
高橋由一画 麻布着色
（今回『田原藩日記』に登場する康直は 20 代から 30 代前半の若者）

のを紹介したいと思います。

2 第11代藩主・三宅康直のオフの過ごし方

(1) 釣り

お城の中でのほほんとしていたと思われがちなお殿様ですが、お国入りしている（田原にいる）時のお殿様・三宅康直は釣りに水練に狩りとかなりアウトドアな毎日を送っています。中でも目を引くのが釣りの記述で、かなりの頻度で現れます。天保7年の7月末から9月前半にかけての記録だけでも以下のとおりです（内容は意識）。

7月25日 正午から今岡あたりへ釣り。供10人。今岡では釣れなかったので、新田網間から松下まで行く。

8月1日 田原藩の^{せきてん}釈奠（孔子を^{まつ}祀る儀式）と藩士の乱舞を鑑賞する合間の時間を利用して田原城袖池で釣り。

8月20日 昼後に新田畑の間で釣り。

8月24日 13時ころから18時ころまで吉胡石掛りから赤石橋で釣り。供9人。

8月29日 13時ころから夕方まで吉胡石掛りから赤石橋で釣り。供7人。

9月4日 正午から日の入りまで釣り。船倉近辺。供7人。

9月7日 正午から夕方まで今岡へ鮎釣り。供7人。

9月14日 正午から17時ころまで浦新田で釣り。供8人。

9月15日 昼後に今岡で釣り。供7人。

なお、こうして記録が残っているのは、康直にとっては趣味でも、お供の藩士たちにとっては仕事だからです。お殿様の釣りのお供のためだけに7人から10人がついていくというのは今の我々には少々驚きです。もっとも当時でも、釣りが好きでない藩士にとってはやはり苦痛の時間であったかもしれません。

ちなみに、天保7年（1836）は天保の大飢饉の年です。既に8月までには低温、長雨、暴風が重なって凶作は免れない状況でした。さらに9月半ばには同じ三河国の加茂郡（豊田市一帯）で一揆が勃発し、大規模な暴動に発展しました。そういうときでも午後の半日をのんびりと釣りに費やすお殿様は、切り替えがうまいのか、凶太い人柄だったのか、どうだったのでしょうか。

このほか、松茸狩りの話を展示しましたが、地元の^{ちょうこうじ}長興寺（現在の久保町に所在）に案内を乞いながらも、過剰な気遣いをしないようにあらかじめ伝える点などは、当時ならではの配慮ともいえるでしょう。

(2) 糟谷磯丸とお殿様

糟谷磯丸（1764～1848）は渥美半島の先端・伊良湖村（現在の田原市伊良湖町）の漁師出身の歌人です。磯丸は文字が読めなかったのですが、30代半ばころに一念発起して和歌の道を志し、隣村・亀山の郡奉行・井本常蔭いもとつねかげに文字と和歌を学びました。その後、磯丸は賀茂真淵かものみぶちや本居宣長もとりのりながの弟子たちが東海地方で開く歌会に参加するようになり、その飾らない人柄と素朴な和歌から多くの人に愛されました。

この磯丸と田原藩士の間瀬九右衛門まぜきゆうえもんが和歌を通して交流があったことから、お殿様のもとに呼ばれることになったのでしょう。天保9年（1838年）と14年の都合二回、磯丸はお殿様のもとで和歌を読み、ご褒美に食事と若干のお金を賜っています。

なお、渡辺崋山の「石竹図」せきちくずを参考資料として展示しました。この絵の右側には「磯麻呂（磯丸の間違いと思われる）の為に写す」と書いてあります。磯丸に贈呈する目的で描いたという意味ですが、もしかしたらお殿様の前で歌を詠んだ謝礼代わりであったのかもしれませんが、なお、崋山は天保4年に磯丸と会って話を交わしており、知らない仲というわけではありません（崋山『客参録』きやくさんろくに記述あり）。



君升田村彦筆「糟谷磯丸像」（部分）

天保8（1837）年

(3) 彗星現る！

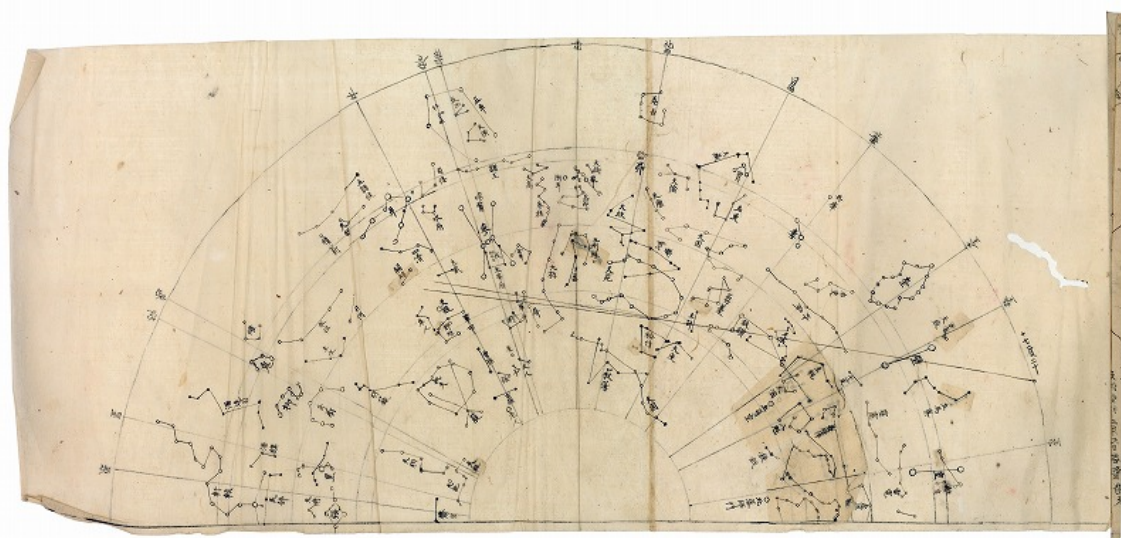
天保14年（1843年）の1月から5月にかけて、宵の西から南にかけての空に巨大な彗星が出現しました。後世に「1843年の大彗星」と呼ばれるこの彗星は2月初めには昼間でもはっきりと見えるようになりました。最も明るい時期には-5等星であったと考えられています。これは木星（-2.9～-1.6等星）よりもかなり明るいものです。

お殿様・康直はこれを見るために2月10日（現在の太陽暦では3月10日）の日暮れから20時ころにかけて、田原城の二ノ丸櫓に登って大彗星を鑑賞しました。田原城からみて西側にある滝頭から南東方向に白気（彗星のこと）が見え、その長さが百間か二百間はあると思われるほどと書いています（一間は約1.82m）。ちなみに実際には、この彗星の尾は少なくとも1億5000万km以上あったと考えられることから、藩日記を書いた藩士の予測は4億倍ほど間違っていたこととなります（かわいそうなツッコミですが）。

さて、田原のお殿様と家来たちは大彗星を見ても珍しがるだけのことでし

たが、日本国内の他の人々の反応には違ったものがありました。この時期には、庶民にも学問に励む者が多く出るようになったほか、さらに蘭学をとおして西洋の科学的な思考法が入るようになりました。この彗星の記録についても、学者のみならず庄屋などを中心にその形状などを詳しく書きとめたものが各地に残っています。また、大坂町奉行所は「この雲（彗星のこと）をきちんと説明できたら褒美を出す」と触れを出しています。一方で、従来どおり彗星を吉兆・凶兆などと捉える人も多くいましたが、時代の変化がこの時期に確かに起こりつつあったようです。

今回特に参考展示した「白気発動星座測量之図」は佐渡島の絵師で天文学者の石井夏海（1783～1848）の描いたものを、後に地理学者となった柴田収蔵（1820～59）が模写したもので、精細な天体図の中に彗星を描きこんでいます。石井は絵を谷文晁（1767～1840）に、さらに油絵と天文学を司馬江漢（1747～1818）に教えを受けたのち、佐渡島に戻って相川奉行所のお抱え絵師となった人物です。確かに夏海の師匠筋はとてもよいのですが、一地方にあっても継続して科学的な考察を続けるとその姿勢と、地元の若い人物（柴田収蔵）がさらに彼に学ぼうとする姿は、やはり時代の変化であるといつてよいように思います。現在、地方にある我々にも学ぶところがありそうです。



白気発動測量之図 5枚目

□ 参考資料

- ・田原町文化財調査会編『田原町史』中巻 田原町、田原町教育委員会、1975
- ・池田雄彦「江戸時代に佐渡で観測された彗星の記録 『柴田収蔵日記』に登場する「白気発動星座測量之図 草稿」『佐渡伝統文化財年報』創刊号、佐渡市教育委員会、2007
- ・安江茂著『伊良湖の歌ひじり 糟谷磯丸』本阿弥書店、2010